移動表現：心的映像と抽出理論

嶋　田　裕　司

Displacement Extracted from the Mental Images of Bodily Motion

Hiroshi SHIMADA

概要

動詞の意味について考えるとき、空間の中での移動を表わす動詞が話題になることが多い。これは、空間における具体物の移動が、日常直接的に体験でき、しかも基本的概念であるため、動詞の意味という理解しにくいものを具体物に頼って確かめることができるからだと思われる。この論文では、移動を表わす文に動作動詞が用いられる仕組みについて考える。従来話題とされてきた移動表現は、移動物体が主語または目的語の指示物に一致する場合に限られるのが普通であった。しかし、ここでは、いわゆる移動動詞（go, come, cross, rise）と移動の様態の動詞（run, walk, waltz）のみならず、後者を含む身体的動作を表わす動詞（lean, nod, shrug ; scream, call, breathe）全般に考察を広げ、移動表現の範囲を広げる。そして、統語形式として、人の身体的動作を表わす動詞が経路表現を伴いうること、また、その主語が人の代わりに無生物になる場合があることに説明を与える。動作動詞の意味表示が Lakoff（1987）の意味での心的映像（mental image）であり、しかも、その映像としての動きの中から移動を抽出して認識する操作があると仮定し、さらに、その移動の概念が経路の表出を促し、換喩的に動作動詞を移動表現のために使用すると考えることによって、それは可能になる。

1．はじめに

人や物が移動することを英語で表現するとき、移動そのものを表わす go や come ばかりでなく、動きの様態を表わす動詞も移動動詞として用いられることはよく知られている。例えば、移動を表わす文（1a）の動詞 went/came の代わりに、ran を入れた文（1b）も可能であり、その文が移動を表わすことは、経路表現である to the station があることからわかる。動詞 run の場合には、移動の様態（つまり足を速く動かすことなど）の意味ばかりでなく、移動そのものの意味も動詞に本来備わっていると言えようが、動詞 waltz を例にして、（1c）と（1d）のような文の意味を比べると、経路表現がないときには、位置の変化を意味する必要はなく、経路表現を伴うときにだけ移動の意味が明確になる（Levin（1993: 105-106）を参照）。

（1）a.　Mary went/came to the station.
　　b.　Mary ran to the station.
　　c.　They waltzed.　　Levin（1993：269）
　　d.　They waltzed across/into/through the room.　Levin（1993：269）

waltz のように、動きを表わす動詞が経路表現を伴うときにだけ、移動をも表わすようになる現象を説明するために、抽象的な移動動詞 MOVE に動きの様態を付加する規則を仮定したり、逆に、

様態を表わす動詞に移動の意味を付与する規則を仮定したりすることが行なわれてきた。いずれの案にせよ、2つの意味要素を合成する点では共通しており、(1d) の場合には、waltz が動作の様態の意味に加えて、移動の意味も持つことになる。移動の意味を様態の意味の外側に付加する規則があるとする案に従えば、図式的には下の (2a) から派生した (2b) が、(1d) の文中の waltz の語彙的な意味表示となる。

(2) a.　waltz : [x WALTZ]
　　b.　waltz : [x GO PATH by [x WALTZ]]

なお、ここでは、大文字の WALTZ は元の動詞の意味を表わし、x は動作の主体を表わす変項であり、GO PATH は移動とその経路を表わす。したがって、(2b) は、人が「踊りながら、どこかを通って行く」という表現に近い意味を表示している。このように、動きの様態の動詞が移動をも表わすときに、様態と移動という2つの意味要素の合成が起きるという考え方は、筆者の知る限りでは、Talmy (1975, 1985) 以来多くの研究者に受け入れられてきた。例えば、Levin and Rapoport (1988)、Pinker (1989 : 182-183)、Jackendoff (1990 : 223-224)、Levin (1991)、Levin and Rappaport Hovav (1992 : 259-260)、太田 (1996) のいずれにおいても、表記方法の相違はあるが、動きの様態と移動の合成を行なう操作があると仮定されている。

従来、Gruber (1965)、Jackendoff (1972, 1990)、Talmy (1975, 1985) を初めとする文献で取り上げられた移動表現は、移動物体が主語または目的語の指示物に一致する場合に限られるのが普通であった。この論文の目的は、移動の概念を統語構造から切り離して定義し直し、(1b) と (1d) のような、主語の指示物の移動を表わす文ばかりでなく、次の (3) のような文においても経路表現が生じて、しかも、それに応じた移動の解釈があることに説明を与えることである。

(3) a.　He leaned down close to me.　WB
　　b.　I . . . screamed into the wind.　WB
　　c.　Racing cars screamed past.　OALD 5

(3a-c) においても、動詞の直後に、down close to me、into the wind、past という経路表現が表れる。しかし、(2a) から (2b) を派生するような複合操作によっては、これらの文を扱うことはできない。この操作によれば、動作の行為者は、主語として表わされ、しかも移動する物体も主語の指示物に一致しなければならない。ところが、(3a) で移動するのは主に上半身であり、(3b) で移動するのは音声である。いずれも、主語に一致していない。(3c) で移動するのは主語の指示物であるが、自動車は生き物ではないので、文字通りの意味で叫ぶことはない。したがって、これらの事実を説明する力は、(2b) のような意味構造には存在しない。(1b) と (1d) のような移動表現のみならず、(3a) と (3b) のような例群も扱うためには、移動と経路の関係を見直して、移動の概念を一般化する必要がある。(3c) で起きている現象に一般的な説明を与えるためには、さらに、動詞の換喩的用法という見方が要求される。この論文で示すことは、(a) 移動は経路から独立した概念であり、逆に、移動の認識が経路を選択させること、(b) これらの動詞の意味表示は心的映像であり、話者はそこから移動を抽出して認識できること、(c) 身体的な動作の名称としての動詞が、その動作の中に見いだされる移動の名称として換喩的に用いられることである。これらを受け入れると、上の例文がより一般的な見通しの中に現れることになる。

ここで、この論文の構成について述べると、第2節では、経路から独立した概念として移動を認

める理由を述べ、さらに、経路表現の種類を整理する。第3節では、移動の抽出理論を示し、その理論が、従来の合成理論では扱うことができない事実をも統一的に扱いうることを見る。第4節では、動作動詞を換喩的に移動表現に用いていると見なすと、統一して扱える事例について論じる。第5節は、事実を整理し直し、理論を要約する。

2．移動と経路の関係

物が移動する場面を想像するとき、それがどこかを通って行く様子を思い描くことが普通であろう。つまり、物が移動すると、動く物はその周辺の物との位置関係を変えることになる。部屋の中でボールが移動する場面を想像してみよう。ボールは人の手を離れ、床の上を転がり、椅子の側を通って壁にあたる。このボールの移動には、手という起点、床と椅子を基準にして指定される通路、壁という着点が関わっている。このような起点、通路、着点を、ここでは経路（path）と呼ぶことにする。経路は、この3種類のいずれかひとつの場合もあれば、いくつかの並列の場合もある。

このように物の移動には、その経路が深く関わっているので、Talmy（1975）のように、移動を物と経路によって捉えようとする考え方が生まれるのも尤もであろう。この考え方では、移動という状況は、背景となる物によって指定される経路を移動物体が通ることとなる。つまり、経路が移動の定義の一部分となるのである。しかしながら、厳密な意味での移動という概念は、経路を必要とはしない。もちろん、移動に経路が伴うことが許されるのは、上のボールの例で明らかではあるが、移動を認識する際に経路は不要である。この論文では、移動を経路から切り離して定義し、経路表現が生じるのは移動という概念がその出現を許しているからであるという考え方を採用する。

文の意味に関与する移動の概念は、ある物が背景との位置関係を変えることとして認識される。その際、どのような経路をたどるか明示する必要はない。移動を表わす動詞 go と move が次の文中に現れる場合について考えてみよう。

(4) a. Can't we go any faster? CIDE
　　b. The bus was already moving when I jumped onto it. OALD 5

これらの文中では、go と move が経路表現を伴わずに生じているため、経路のない移動が表現されている。(4)が表わす移動は、人や自動車が街路や町などを暗黙の背景にして、その中の自らの位置を変えていくことである。その経路が不明確であっても、移動自体は認識することができる。

移動の認識が経路に依存しないことは上の例で示したが、逆に、経路という概念は、物の移動を前提としていると考えられる。この仮定に従うと、物が移動するときに限って、その物の経路を指定することができることになる。即ち、次の(5a)で across the roadという経路表現が生じるのは、went にある移動の意味が経路の表出を許しているからである。言い換えると、移動に経路を添えることによって、その移動を詳しく特徴づけることになる。

(5) a. Mary went across the road.
　　b. My best friend lives across the road. LDCE 3

ただし、(5b) のように、物がある位置を占めていることを表わす場合にも経路表現が現れることがあるが、その場合でさえ、指定された位置は、経路の終端であり、その位置への移動という概念が伴っている。この経路の終端としての位置については、古くは Bennett(1975: 35-39)、Brugman（1981: 36-40）が論じている。

次の節で動作と移動の関係について考えるに当たって、ここで、移動の概念の存在を知る手がかりとなる経路表現について整理して例示したい。経路は、前置詞・副詞によって表わされている場合と動詞の意味に組み込まれている場合がある。後者の動詞としては、（6）の例があるが（Levin（1993：263）参照）、本論に直接関わらないので動詞の列挙にとどめる。前置詞・副詞に関して、経路を指定するための基準に依って分類すると、その基準が、移動する物の向き（（7a-b）on, back）、背景となる物の形（（7c-e）across, out）、特定の場所（（7f）home）、上下方向（（7g）up）、上下方向と物（（7h）up）の場合に分けられる。言うまでもなく、起点と着点を表わす to と from（7 i-j）も経路表現に含まれる。

（6）come, advance, recede, cross, enter, rise, ascend, reach, leave

（7）a.　We can't go on any further. . . .　LDPV
　　b.　Go back a step or two, you're too near.　LDPV
　　c.　Mary went across the road.　＝（5a）
　　d.　I'll just go across and get a loaf of bread.　LDPV
　　e.　Mary went out (of the room).
　　f.　I must be going home, it's getting very late.　LDPV
　　g.　Smoke was going up in a straight line. . . .　LDPV
　　h.　Jack and Jill went up the hill.　LDPV
　　i.　I went to the lake.
　　j.　Which station does the train go from？　LDPV

この論文では、（7）で示されるような経路表現が文中に現れることは、移動という意味概念によって許されていると仮定する。この仮定を受け入れると、逆に、ある文中に経路表現が存在することが、主要部の動詞に移動の意味が存在することを示していることになる。ただし、（5b）のように経路によって位置を指定する表現は、位置表現であり、経路表現ではない。

この節では、移動と経路がそれぞれ独立して特徴づけられること、また、経路表現が移動に依存していることを述べてきた。次の節では、移動と経路のこの関係に基づいて、動作動詞の意味表示に認められる移動が文の構成にどのように関わるのかを明らかにする。

3．動作から抽出される移動

この節では、人の動作を表わす動詞（動作動詞）が経路表現を従える事例を観察し、なぜそれが可能になるのかを考える。この問題に取りかかるにあたって、最初に、動作動詞を移動動詞から区別し、次に、動作動詞の意味表示に関する仮説を提示する。その後で、意味表示に見出される移動が経路表現の出現を許していることを主張する。

初めに、移動動詞と動作動詞の区別をしよう。移動動詞とは、上で述べたように、基本的に物の移動を表わす動詞であり、go と move の他に、（6）に挙げた経路の意味を包摂する動詞がある。一方、この論文で動作動詞と呼ぶものは、主に人の身体的動きを表わす動詞であり、その下位類としては、いわゆる移動の様態を表わす動詞（run, walk, waltz）、姿勢の変化を表わす動詞（lean, bend, nod, shrug, reach）、呼吸・発声器官の活動を表わす動詞（breathe, cough, spit；scream, yell, call, shout, whisper, whistle, bellow）がある。

次に、動作動詞の意味表示について考えよう。本論では、動作動詞の意味表示は、心の中で思い描く映像であると仮定する。これらの動詞の意味表示は、音韻論や古典的意味論における意味素性

の複合体のように、原始的要素の組合わせから成るのではなく、全体的まとまりのある心的映像（mental image）から成り立っていると考える。例えば、walkの意味は、学習辞典では〈(of a person) to move along at a slow or moderate pace by lifting up and putting down each foot in turn〉(OALD5)と記されているが、本論ではこの動詞の意味表示は、辞典の定義のように言語記号で表示されるのでも、意味素性の集合として表示されるのでもなく、心的な映像として表示されると仮定する。言語で記される辞書的な定義は、この心的映像としての意味表示を言語を用いて写し取ったものということになる。なお、古典的意味論における意味表示に対する批判は、Taylor(1989)を参照されたい。また、心的映像（mental image）という用語は、Lakoff（1987）で用いられた意味でここでも用いる。動作動詞の心的映像は、具体的で明瞭であるので、Lakoff（1987：267-268）が基本レベル構造（basic-level structure）と呼ぶもの、即ち、身体経験によって直接的に意味を与えられる構造に属すると考える。

ここで「移動」と「動き」という用語の区別を明確にしておきたい。移動とは、すでに述べたように、物が背景との位置関係を変えることであるのに対して、動きとは動作動詞の心的映像の全体または一部分を指す。この区別は、動作動詞がなぜ経路表現を従えるかを考える際に重要である。次に述べるように、人は動きの中に移動を認識するからである。

動作動詞の意味表示は心的映像であるという仮定に加えて、人はその全体的動きの中に部分的な動きを認めることができ、さらに、動きを移動と見なすことがあると仮定しても無理は生じないであろう。つまり、人は全体としてまとまりのある心的映像の一部分に注目したり、その一部分または全体を移動として解釈することができると考える。再び walk の例を用いると、この動詞の心的映像は、人が左右の足を交互に前に出すことを含んでいるが、動き全体に背景をつけると、その人物の移動として認識できる。あるいは、動詞 lean を例にすると、その心的映像には、人が身を傾ける動きがあり、特に頭や上半身に注目すると、それが元の位置から離れることになる。即ち、元の姿勢を背景として、その部分の動きが移動として認められることになる。このように、動作動詞の心的映像の中に移動を見ることができる。そして、この移動の認識によって経路表現の生起が許されることになる。

ここまでを要約すると、動作動詞の意味表示は心的映像であり、その動きの中に見出された移動が経路表現を従えると考える。移動とは、動作動詞の場合、心的映像から抽出された結果生じる認識ということになる。移動に関するこの見解、即ち、移動とは心的映像の一部または全体から抽出された認識であるとする見方を、移動の抽出理論と呼ぶこととする。なお、(2b) で例示した従来の見解を移動の合成理論と呼んで、2つの見方を対比してゆく。

確かに、いわゆる移動の様態の動詞に関する限り、わざわざ抽出理論を持ち出すまでもなく、合成理論によっても移動の意味を扱うことができよう。再び、動詞 waltz を例にすると、抽出理論によれば、(8a) の waltz の意味は〈人が踊る〉心的映像であり、その全体的動きに背景を付けると、動きを移動として抽出することができ、その移動の概念が経路表現を従えていることになる。一方、合成理論の要点を繰り返すと、(8a) の動詞 waltz が移動の意味を持つのは、動きの様態 WALTZ に移動と経路が付加されて、(8b) の複合語彙構造を持つようになるからだとされる。

(8) a. They waltzed across/into/through the room. Levin (1993: 269) = (1d)
　　b. waltz: [x GO PATH by [x WALTZ]] = (2b)

合成理論による (8b) は、「人が踊りながら、(あるいは踊ることによって) 移動する」ことを表示するので、(8a) の文の意味を正しく表わしているように見える。

しかしながら、合成理論には、2つの欠点がある。第一に、(8b) からわかるように、動く物と移動する物が同一物である場合だけしか扱うことができない点である。その2つが異なる物である場合は、別の語彙規則が必要になる。第二に、様態の動詞とは何かという問題を考えずに、その意味を未分析のまま単に大文字で WALTZ としている点である。このままでは、移動と経路の意味を付加できる動詞とできない動詞の区別は全くつかず、規則素性に頼って個々に記すという説得力のない結果に陥る。それとは対照的に、抽出理論によれば、このような問題は生じない。抽出理論においては、移動とは、心的映像の中に見出されるものなので、全体的映像ではなく、部分的な動きが移動として抽出されてもよいことになる。したがって、文の主語の指示物と移動物体が一致する必要はないので、第一の問題点は生じない。また、動作動詞の意味を心的映像と見なして、さらに、その動きの全体と細部を見渡して、その結果を文の構造に反映できると仮定する点で、言語使用者が語の意味を分析することを認めている。この理論のもとでは、ある種の動作動詞のみに移動の抽出が行なわれて、しかも、それに相応しい経路表現が生じることは当然の結果となるので、第二の問題点も解決できる。

そこで、移動物体が主語の指示物と一致ない事例を観察しよう。初めに、姿勢の変化を表わす動詞 lean, bend, nod, shrug, reach について考えると、これらは主語のみと共起して、Mary leaned/bent/nodded/shrugged/reached. のようになる場合もあれば、経路表現を従えて、(9)-(13) のような文を構成することもある。抽出理論に従って、(9)-(10) の lean, bend の意味表示を〈人が体を傾ける〉映像と見なせば、その動きの中に頭あるいは上半身の移動が見出される。さらに、抽出された移動が適切な経路表現の表出を促すことになる。(11) の nod の場合には、〈人が頭を一度傾ける〉。頭の移動の延長方向を経路表現が指定している。(12) の shrug の例は、〈人が両肩を上げる(すくめる)〉動きに身体あるいは上半身の移動を認めて、それに相応しい経路表現を加えている。(13) の reach は、〈人が手を伸ばす〉動きであり、その中から手の移動を抽出して、それによって手の移動経路が表出する。いずれの例においても、移動するのは主語が指示する人物全体ではなく、その一部分である。合成理論によっては、これらを waltz などの様態の動詞と同等に扱うことはできない。

(9) a. He leaned down close to me. WB = (3a)
　　b. Maria leaned across and whispered. . . . WB
(10) a. She bent over to pick up her handbag. LOB: K10 64
　　b. As Sir Harry bent forward through the coach door. . . 6 WB
(11) a. He nodded towards the drawing-room. . . . LOB: P11 22
　　b. He nodded down the garden. . . . LOB: L21 204
(12) a. Shivering, Kevin shrugged deeper into his overcoat. . . . WB
　　b. Quickly I slipped off my jacket, hung the holster from my shoulder and shrugged into the jacket again. LOB: N08 104
(13) a. Krasin reached across the table with his left hand. WB
　　b. Hinton reached out and put one hand on my arm. WB

動きの中に特定の部分が移動として認識されていることは、移動が顕著に認められる頭・肩・手が次の例のように目的語として表出されることによっても支持される。

(14) a. . . . I leaned my head against the steering wheel. . . . WB

b. Gaffer bent his head over the newspaper. . . . WB
c. Rosie nodded her head. WB
d. He shrugged his shoulders. LOB : P24 48
e. He reached out his hand to draw her back from her sudden enmity. . . . WB

次に、身体の動きに伴う移動が、体以外の物に見いだされる例を見よう。Mary breathed/coughed/spat. のように自動詞 breathe, cough, spit が主語のみを伴う場合、抽出理論に従えば、動きの心的映像の中に息や唾の移動が認められる。この移動が経路の表出を許すことになる。さらに、この場合にも、移動する物は名詞句として表れることがある。ただし、このような名詞句の表出は、移動する物が動詞の意味からは予測できない場合に生じやすい。

(15) a. The doctor told me to breathe in and then breathe out (again) slowly. OALD 5
b. Dolittle coughed into his hand. . . . WB
c. The boys were spitting out of the classroom window. OALD 5
(16) a. Sea turtles live in the sea but breathe air and lay eggs on the beach. WB
b. He started coughing blood. COBUILD 1
c. The baby spat its food onto the table. OALD 5

この第 2 の類の下位類として、発声の動詞がある。John screamed/yelled/called/shouted/whispered/whistled/bellowed. のような声を出すことを表わす動詞は、下の例のように経路表現を伴うことがある。発声の動詞の意味として、人が発声の動作を行なって、その結果生じた音声が伝播する心的映像を想定すれば、抽出理論によって経路表現の表出を扱うことができる。発声の動詞の意味は、人が発音器官を動かして音声を出す部分と、その音が伝わる部分とからなる動きの映像であると仮定しよう。後者の部分は、音声が元の位置から離れる移動として認識されるので、その移動が経路の明示を許すことになる。(17a) を例にすると、scream の〈人が金切り声をあげて、その音声が伝わる〉心的映像の中で、音声の動きを移動として抽出し、その移動が経路表現 into the wind の表出を許すことになる。(17b-i) についても同様な説明ができよう。

(17) a. I . . . screamed into the wind. WB = (3 b)
b. He screamed to her across the water. KDEC
c. I yelled through the fence to my neighbor. KDEC
d. . . . he called coldly across his shoulder. . . . WB
e. . . . he sticks his head in the door and shouts up the stairs. Brown : L11 0550
f. . . . and I shouted down to the boy. . . . Brown : P26 0780
g. . . . she whispered incoherently into his ear. . . . WB
h. The brooding bird would whistle to its mate. . . . WB
i. Roger bellowed down the hall at her. WB

この動詞群でも、移動する物が目的語として表出されることがあるが、それは音声そのものを指す名称ではなく、音声が運ぶ内容である。この類では、動詞と名詞は同じ音形を持つので、同音の名詞は繰り返されずに、音に伴って移動する内容が名詞句として生じる。

(18) a. . . . he screamed his agony. LOB : N22 190
b. Christian pushed him away, yelling abuse. WB
c. . . . someone called my name. WB
d. Steve shouted something. . . . WB
e. She whispered his name. COBUILD 2
f. The male will whistle various calls. . . . WB
g. . . . he pushes the door open and bellows 'Hallo!' WB

(15) における breathe 類においても、(17) の scream 類においても、移動するものは、主語の指示物でもなく、その一部分でもない。合成理論によっては、これらを様態動詞と統一して扱うことはできない。

先に、合成理論の第二の問題点として、移動と経路の意味（GO PATH）を付加することができる動詞とできない動詞との区別がつかないことを指摘した。具体的には、この見解では、次の文(19a）が（19b）の意味に近い解釈を受けるのを阻止することはできない。

(19) a. I . . . screamed into the wind. WB = (17a)
b. I went into the wind screaming.

つまり、(19a) の本来の解釈は、「私が金切り声をあげて、その声が風の中に入って行った」ということであるが、合成理論によれば、動作主体と移動物は一致するので、(19a) は私の移動とされ、「私が金切り声をあげながら、風の中に入って行った」という誤った解釈 (19b) を与えられる。移動と経路を付加する規則によれば、(19a) が (19b) の解釈を持たないことが例外的となり、それを扱うために規則素性のような何らかの仕組みを付け加える必要が生まれる。合成理論を維持しようとする Levin and Rappaport Hovav (1995 : 202) でさえ、特定の動詞だけがこの規則の適用を受ける事実に何の説明も付かないことを認めている。彼らがこの問題点を克服できない理由は、動詞の意味に関して古典的な意味素性理論を暗黙の前提としているからであると思われる。その上、合成理論は、そのままでは上で述べた正しい解釈を (19a) に与えることもできない。つまり、移動するのは音声であるということを扱うことができない。

抽出理論によれば、(19a) が「私が金切り声をあげながら、風の中に入って行った」という誤った解釈 (19b) になることは決してない。なぜなら、動詞 scream の意味は、〈人が金切り声をあげて、その音声が伝わる〉心的映像であり、そこから移動として抽出できるのは音声の伝播のみであり、人の動きではない。したがって、抽出理論によれば、scream の主語が動作主 (agent) と移動物体 (theme) を兼ねることはありえない。

この節を要約すると、様態の動詞のみならず、姿勢の変化の動詞、呼吸・発声器官の活動を表わす動詞も移動の構文に生じる事実を観察してきた。これらの文に経路表現が現れることを説明するためには、動作動詞の意味表示が心的映像であること、その中から移動を抽出できる場合に限って、それに相応しい経路表現が現れると考えると説明が付くことを確かめてきた。そして、移動の合成理論では、これらの現象を統一的に扱うことができないことを明らかにした。

4．換喩的移動表現

前節では、心的映像の中に移動を認めて、その移動が経路表現を従えることを明らかにしたが、本節では、移動が関心の中心になる場合について考察する。身体的動作を表わす動詞が、その心的

映像から抽出された移動部分のみを表現する場合があると考えると、統一して扱える現象があることを示したい。

初めに、姿勢の変化を表わす動詞を例に挙げると、上の (9)-(14) のように動作を行なう人物が主語になるのではなく、次の (20) に示すように、頭や手などの身体の移動部分が主語になることも可能である。これは話者が人の姿勢の変化に関心を持ちながら、その移動部分に特に注目するときに生じる文であると思われる。

(20) a. The blurred heads of holiday-makers leaned out, waving and kissing to the platform of spectators.... LOB: N22 158
b. His head bent and his mouth opened against those bruises.... WB
c. Her head nodded forward and fell onto her knees. WB
d. A hand reached down and gripped him around the throat. WB

このように、動作動詞が、動き全体の意味で用いられるのではなく、動きから抽出された移動の意味で用いられている文を換喩的移動表現と呼ぶことにする。(20)の例は、身体的な動作に与えられた名称が、そこに認識できる移動の名称として代用される場合があることを示している。

発声の動詞の場合にも、換喩的移動表現が生じる。これらの動詞の心的映像には、発声の動きと音声の動きを認めることができると考えたが、音声の動きを移動として抽出して、その部分を中心に文を組み立てると (21) のような例が生まれる。この見方によれば、これらの文の意味は、ある経路をたどって移動する音に、その音と共に移動する物が主語として添えられているということになる。

(21) a. Racing cars screamed past. OALD5 = (3c)
b. The car's tires whispered through the puddles. COBUILD 2
c. As I stood up a bullet whistled past my back. COBUILD 2

つまり、(21a)の文を換喩的表現と見なすと、この文は、「金切り声が通り過ぎて、その音の移動と共に自動車が過ぎていく」という意味を持つことになる。(21b)では、「囁き声が水溜りを通り過ぎ、その移動に車輪の移動が一致している」という解釈になる。また、(21c) でも、同じような解釈になる。(21) において、音の移動に具体物の移動が伴うことは、上の (18) の例群で、音に内容が目的語として伴うことに平行している。(21) では、それが racing cars や the car's tires などの具体物であり、(18) では his agony, abuse など形のない内容である点で異なるが、(21) に類する換喩的移動表現の場合にも、比喩的な文としては、(22) に示すように形のない the thought や pain が主語に立つことがある。

(22) a. This happens to other people, not us, the thought screamed through her head. WB
b. It was like hitting a sack of salt. Pain shout up Curt's arm clear to the shoulder.... [sic] Brown: N12 1220

換喩的移動表現が全ての発声動詞で等しく生じるわけではない。おそらく、この表現は移動として抽出できる意味の部分が比較的豊富な場合に限って許されると思われる。例えば roar の場合、(23a) の心的映像の全体的表現と、(23b) の換喩的移動表現の両方が観察される。

(23) a. The whole assembly roared its approval. WB
　　b. As I left, a tractor roared by. . . . WB

しかし、動詞によっては換喩的表現が辞典とコーパスの中に見つからないこともある。この現象を資料が少な過ぎたために起きたことと解釈することもできるが、むしろ、このことが換喩的移動表現の生じる要因を示唆していると解釈するほうがよいと思われる。発声の動詞の換喩的移動表現の例を (21)-(22) で見たが、その中に例えば call, cry, yell は含まれていない。学習用辞典 (CIDE, COBUILD 2 , HEED, KDEC, LDCE 3 , OALD 5) を調べても、これらには移動の用例が見つからない。実際に移動に注目した表現が生じる scream, whisper, whistle などと比べると、call, cry, yell は伝播する音の音色が関わっていないように思われる (Shimada (1995 : 83) 参照)。これと同様の現象は、次に見る移動の様態の動詞にも現れる。

換喩的移動表現は、姿勢の変化と発声の動詞群に限らず、いわゆる移動の様態の動詞でも生じる。この動詞群でも、心的映像から抽出した移動に関心が移ると、即ち移動物と背景との位置関係の変化に注目することになると、映像の中に認められる手足などの部分的動きは、ぼやけて問題にならなくなる。例えば、動詞 run の意味は〈足を歩く時よりも速く動かして、速く移動する〉心的映像であるが、この全体的映像は (24a) の文中に現れる。この映像のうち〈速く移動する〉ことに注目して、移動物と背景の位置変化に関心を移すと、身体各部分の動きは問題にならなくなり、(24b) のように移動する物は、無生物でもよくなる。これは、姿勢変化の動詞 lean, nod や発声の動詞 scream や whistle で観察した換喩的移動表現が生じるのと同じ過程である。動詞 dance, crawl の場合も同様で、それぞれの意味は、〈音楽に合わせて身体を動かす〉、〈体を地につけて (近づけて) 手と足で、ゆっくり移動する〉心的映像である。それぞれの全体的映像は、人を主語として (25a) と (26a) の文中に現れる。映像の中で、動作主体の移動に注目すると、移動物と背景との関係変化の様子に関心が移り、身体各部の動きは意識されなくなる。このとき (25b) と (26b) のように、無生物主語が現れる。

(24) a. I had to run to catch the bus. OALD 5
　　b. The van ran off the road into the ditch. OALD 5
(25) a. She danced gracefully across the stage. KDEC
　　b. . . . the flickering, yellow lights still danced across the ceiling. WB
(26) a. Some babies don't crawl at all, preferring to shuffle along on their bottoms. . . . WB
　　b. One persistent taxi follows him through the street, crawling by the sidewalk. . . .
　　LOB : E09 12

この類の動詞全てが換喩的移動表現を許すわけではないのは、発声の動詞の場合と同じである。例えば、動詞 walk は、無生物を主語にとることはない。つまり、*The car walked along. とは普通は言わないであろう。walk は、人間の移動としては標準的なものであるから、run や crawl に比べると速度の情報が乏しく、dance と比べても特異な動きが認められない。したがって、walk の心的映像には、移動、即ち、背景との関係変化の様態に関する情報が乏しく、移動にのみ注目することができない。この点で、移動の様態の動詞 walk は、発声の動詞 call, cry, yell に似ている。両者とも移動部分のみを抽出して、それを関心の中心に据える程は移動の意味が豊かではない。

重要なことは、上で述べた換喩的移動表現という概念を用いると、姿勢の変化、発声、移動の様

態という3つの動詞群で起きている現象を統一して扱うことができる点である。どの動作動詞の場合でも、心的映像の中に移動が認められるとき、その移動の部分の情報が注目に値するほど豊富であれば、その動詞は、そのままの音形で移動の名称として用いることができる。

5．おわりに

これまでに示したことを整理してみよう。動作動詞は多義的であり、人が身体を動かすことのみならず、その動きの中に見出される移動をも表わす。さらに、動作動詞が換喩的に移動のみを表すこともある。観察した主な事実は、(a) 動作動詞が動作主 (agent) をとるばかりでなく経路表現 (path) を従えることも可能なこと、(b) 動作主のみならず移動物体 (theme) も表出することがあること、(c) 動作主の代わりに移動物体が主語になる文があることである。この事実は、動作動詞の下位類である(27)のような様態の動詞のみならず、別の2つの下位類である姿勢変化の動詞(28)と発声の動詞 (29) においても観察される。

(27) a. Mary ran to the station. = (1b)
　　b. *Mary ran herself to the station.
　　c. The van ran off the road into the ditch. OALD 5 = (24b)
(28) a. He leaned down close to me. WB = (9a)
　　b. I leaned my head against the steering wheel.... WB = (14a)
　　c. The blurred heads of holiday-makers leaned out, waving and kissing to the platform of spectators.... LOB: N22 158 = (20a)
(29) a. I... screamed into the wind. WB = (17a)
　　b. ...he screamed his agony. LOB: N22 190 = (18a)
　　c. Racing cars screamed past. OALD 5 = (21a)

従来注目されてきたことは、(27a-b) に示すように、様態動詞が移動を表わすときに、主語が動作主と移動物体を兼ねる現象である。しかし、これは特殊な場合であり、一般的には (28) と (29) が示すように、主語が2つの役割を兼ねることはない。また、発声の動詞が移動の文に生じるとき、主語が移動物体と動作主を兼ねてはならないという制約があると言われているが (例えば、Levin and Rappaport Hovav (1995: 197))、この制約は、第3節の最後に示したように抽出理論の帰結となる。

これらの事実を扱うために、移動の抽出理論と呼ぶものを提案した。動作動詞の意味表示は心的映像であり、話者は、その映像としての動きの中から、移動を抽出すると仮定した。その移動の概念が経路の表出を促し、さらに、移動の意味が豊かな動詞の場合には、換喩的に移動部分に着目した文が生まれることになると仮定した。この見方によれば、心的映像のどの部分が移動として抽出できるかは、動詞によって異なり、動作主と移動物の重複の程度は多様であることが許される。また、移動の意味が換喩を許すほど豊富であるかどうかも、動詞によって異なることが当然のこととなる。さらに、動作動詞の下位分類も話者にとっては不要である。様態の動詞、姿勢の変化の動詞、発声の動詞などを区別する標識がなくとも、動詞の意味表示である心的映像があれば、上で仮定した原則に従って適切な文とその解釈が得られる。したがって、このように考えると、合成理論で設定せざるをえない個々の規則とその制約を認める必要はなくなる。

ところで、文の意味のうち、どこまでが動詞の語彙的意味であり、どこからが構造的意味なのだろうか。動作動詞が移動表現に現れる場合に限れば、移動とは、語の意味としての心的映像から一

般原則によって抽出される概念であるので、語彙的意味の各部分に固有の情報と考える必要はなく、そこから移動を抽出する一般的原理が与える意味ということになる。したがって、これらの移動表現は、移動という非語彙的概念によって生み出されることになるであろう。この意味で、移動は構造としての意味と言えよう。ただし、全ての移動表現が、非語彙的な移動概念のみによって構成されるわけではないことは、go や come などの本来移動を表す動詞が存在することから明らかであろう。

さて、移動表現を話題の中心にして、その中に動作動詞が現れる場合に何が起こっているのかを考えてきたが、ここで見方を変えて、話題の中心を動詞に移すと、実は上で観察した事柄は動詞の多義性の問題の一例として捉え直すことができる。そして動詞一般の多義性の問題は、心的映像、そこからの情報の抽出、換喩的表現という概念を導入することによってかなりの説明が可能になるであろう。なお、これらの概念がどの程度有効に働くのか、またそれぞれの概念をどの程度明確に把握することができるのかという課題が残されているということは言うまでもない。

謝辞

移動についての論文を紹介してくださった八木孝夫君にお礼を申し上げます。草稿を丁寧に読み、内容と表現について助言をくださった篠木れい子さんに感謝いたします。

参考文献

Bennett, David C. (1975) *Spatial and Temporal Uses of English Prepositions : An Essay in Stratificational Semantics*, Longman Group Ltd., London.

Brugman, Claudia M. (1981) *The Story of* Over. M.A.Thesis, University of California, Berkeley. Available from Garland Publishing, Inc., New York.

Gruber, Jeffrey S. (1976) *Lexical Structures in Syntax and Semantics,* North-Holland Publishing Company, Amsterdam.

Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar,* MIT Press, Cambridge, MA.

Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures,* MIT Press, Cambridge, MA.

Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things : What Categories Reveal about the Mind,* The University of Chicago Press, Chicago.

Levin, Beth (1991) "Building a Lexicon : The Contribution of Linguistics," *International Journal of Lexicography*, 4-3, 205-226, also in *Challenges in Natural Language Processing*, ed. by M. Bates and R.M.Weischedel (1993) 76-98, Cambridge University Press, Cambridge.

Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations : A Preliminary Investigation,* The University of Chicago Press, Chicago.

Levin, Beth and Tova R.Rapoport (1988) "Lexical Subordination," *Papers from the 24th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 275-289.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1992) "The Lexical Semantics of Verbs of Motion : the Perspective from Unaccusativity," *Thematic Structure : Its Role in Grammar*, ed. by I.M. Roca, 247-269, Foris Publications, New York.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity : At the Syntax-Lexical Semantics Interface,* MIT Press, Cambridge, MA.

太田　朗 (1996)「動詞の意味と統語構造――日英語の比較――」 *Studies in English Linguistics & Literature,* (京都外国語大学英米語学科研究会) 12号 1-30、太田　朗 (1997)『私の遍歴――英語の研究と教育をめぐって――』245-272、大修書店に再録。

Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition : The Acquisition of Argument Structure,* MIT Press, Cambridge, MA.

Shimada, Hiroshi (1995) "Expressing Motion through Space: Lexical versus Compositional Meanings," 群馬県立女子大学紀要 第16号 (73)-(89).

Talmy, Leonard (1975) "Semantics and Syntax of Motion," *Syntax and Semantics, Volume* 4, ed. by John P.Kimball, 181-238, Academic Press, New York.

Talmy, Leonard (1985) "Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms," *Language Typology and Syntactic Description, Volume III,* ed. by T.Shopen, Cambridge University Press, Cambridge.

Taylor, John R. (1989, 1995) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory,* Oxford University Press, Oxford. 辻 幸夫訳 (1996)『認知言語学のための14章』 紀伊國屋書店。

CIDE=*Cambridge International Dictionary* of *English* (1995) Cambridge University Press, Cambridge.

COBUILD1&2= *Collins COBUILD English Dictionary* (1987, 1995) HarperCollins Publishers Ltd, London.

HEED=*Harrap's Essential English Dictionary* (1995) Chambers Harrap Publishers Ltd, Edinburgh.

KDEC=*The Kenkyusha Dictionary of English Collocations*『新編英和活用大辞典』(1995) 研究社。

LDCE3=*Longman Dictionary of Contemporary English, Third Edition* (1995) Longman Group Ltd, Essex.

LDPV=*Longman Dictionary of Phrasal Verbs* (1983) Longman Group Ltd, Essex.

OALD5=*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English, Fifth Edition* (1995) Oxford University Press, Oxford.

Brown=Brown Corpus, Format II, Norwegian Computing Centre for the Humanities.

LOB=LOB Corpus Text, Untagged Version, Norwegian Computing Centre for the Humanities.

WB=Word Bank in *COBUILD on CD-ROM* (1995) HarperCollins Publishers Ltd.